

*書評と紹介

『新自由主義批判の再構築——企業社会・開発主義・福祉国家』

(赤堀正成・岩佐卓也編著)

弁護士寺内大介のたんぽぽコーヒープレイク

——熊本の弁護士寺内大介のブログです。 by tanpopo-tera

渡辺治グループへの挑戦状

大学時代の友人に『水俣の教訓を福島へ』の書評を依頼したら、代わりに本書の書評を頼まれた。本

書は、若手研究者による、渡辺グループへの挑戦状である。

木下武男批判

赤堀正成（労働科学研究所）は、渡辺グループの木下武男氏が新自由主義の論客である八代尚宏氏との対談で、「年功賃金と終身雇用の解体」を主張している点をとらえ、新福祉国家を提唱している論者が、



(法律文化社、2010年8月
3,150円(税込))

いつのまにか新自由主義者と共闘してしまう危険を指摘する。
確かに、正規労働者の権利を切り下げることによっては、非正規労働者の権利を勝ち取ることは出来ず、そこにワーキング・プア問題解決の難しさがあるように思う。

後藤道夫批判

岩佐卓也（神戸大学）は、同じく渡辺グループの後藤道夫氏が、戦後日本の国家体制を「開発主義」と規定し、新自由主義がこれを攻撃対象としていると捉える点を批判する。すなわち、「新自由主義の『開発主義』という対抗図式が、実際には福祉国家への攻撃を許すことになりはしないかという危惧であるが、ややわかりにくい。

この点は、岩佐自身が「さわめて立ち遅れている」というとおり、「新自由主義によって何がどのようにして壊され、それに対抗する手がかりはどこにあるのか」を分析する作業が急務であろう。

社会的多数派形成のために

兵頭淳史（専修大学）は、「新福祉国家」をめざす渡辺グループの方向性には基本的に同調しつつも、社会政策論や運動が最下層にもつぱら焦点をあてて一方で、中間層の利害を等閑視すれば、福祉国家構想の実現は非現実的なものにならざるを得ないのではないかと問題提起する。

「生存権原理を『最低生活保障』を超えた『生活の質』の保障をもたらず理念として発展させることを通じてこそ、『福祉国家』構想の実現へ向けての不可欠な条件である社会的多数派の形成が実現するのではないか」との兵頭の指摘は、本書の各論者に通底する問題意識であろう。

安全神話を超えて

渡辺グループの論考を無批判に受け入れる傾向は、原発の安全神話にどっぷりつかっていた感性に通じるものがあるかもしれない。

「新自由主義批判を行う論者にも批判の矛先を向けていることが、批判派の内部分裂をもたらして運動にマイナスではないかと懸念する向きもあるかもしれないが、忌憚らない論争を続けていくことこそ運動の前進に資するものと確信する」という新進気鋭の編者らの議論の深化と広がり大いに期待したい。

(2011.9.26)

<http://tanpopoter.exblog.jp/m2011-09-01/>

◇ Ctrl キーを押さえながら上のアドレスをクリックすると、サイトに行きます。